

日墨および米墨

(墨其西人の對日感情と對米感情)

前墨国公使 堀口九萬一

大正二年(一九一三年)九月二十四日から二十五日まで日米新聞に掲載されたもの。

(一)

墨西哥人の日本人に對して極めて深い同情のあるのは今に始まった事でない。墨其西に排米熱が高い一方に加拿太(カナダ)に排日事件が起つて居るから、其處で故らに親日感情を表示して米人に對し面當をするとかいふ風にもみれば見らるるけれども、其實何等左様の政治上に勃發した一時的の原因でなく米国の有無に關せず、墨其西人の抱く固有の感情だ。

然らば此感情は何に根帯するといふに、同人種といふ考えから来て居る。實、墨其西人と日本人とは酷肖して居る。髪の色、目の色といふが如き部分的でなく容貌風采の凡てを挙つて擧て扱て扱て其性質迄が殆んど相似て居る。それ故彼等は日本人を以て全く同人種とし其國運近來の發展を見ては全く同人種の光榮と喜んで居る。其の互に似た證據には能く相方見損ひをやる。墨其西人に出逢つて日本人たるを知らず自國人の積で聲を掛けて驚く事もあり日本人も亦道を歩行して道が分らず、行逢ふ人を是は日本人だと思つて尋ねて見ると、意外にも墨西哥語で答へられて失敗する事もある。斯いうふ如き實状だから、若し異人種排斥といふ如き感情が實際各民族間に存在するものとしたならば、一方自ら同人種は互に強烈に援き合ふといふ感情も起るべきだ。墨西哥人の日本人を好むは正に是に本くので、職業の如何、地位の如何を問はず、山村水廊至る處此感情が旺盛であるが、何等それは外に深い原因を有するものでない。全く酒好きの酒を好み、餅好きの餅を好むと一般だ何が故に酒を好むかと酒好きに問ひ、何が故に餅を好むかと餅好きに問うたなら共に返答に困るであろうが、墨西哥人の日本人を好むも亦是と同様で、只好むから好むといふより他はあるまい。其處に何等の理屈はない。併し是は理屈無しで大に理屈がある。理屈無くして日本人を愛する所處、最も是れ深く日本人を愛する理屈だ。

墨其西には現在二百人計り日本人が居るが、皆職を持って相應に働いている、店を出すものもあれば、背に荷を負つて行商するものもある、牧畜するものもあるれば農業をするものもある、氷を製するものもあればラムネを製するものもある。仕事は様々だが何れも皆能く發展する。それは同種類の店は他に幾らもあるけれど、矢張り同人種的感情から。同じ買ふなら他國人の店の品よりも日本人の店の

品を買はうといふ考が墨其西人にあるからで、日本人は語も下手、商の仕振も下手だけれど、猶且つ其店は繁盛する、是は獨り都のみならず、如何様な山村僻地に往つても同様である、斯様いふ有様で、日墨両国人の關係は、官は官、民は民、融和する。

それ故我々の墨西哥に居る心地は非常に宣い、特に亜米利加に暫く居つて、それから墨其西人に来るものは一層それを強く感じ、肩身が廣くなつた様に思ふといふ。然らば何の故かと反問すると、墨其西の首府に於ては町の様子、家の構造凡て米國ソツクリであるが、只何となくアトモツフェアが違ふ様に思ふといふ。實に其通り、墨其西人の我等に對する感情のあらゆる方面に發露が自然に然らしむるので、他郷に在つて猶ほ故郷に在るかの如き感じがするのである。

(一)

それ故私などが公使館に居つて仕事をするにも非常に都合が好かつた。公使館員は上は公使より下書記生に至る迄も皆墨西哥官民の同情を得て居つたから、前後四年の私の在任中、色々の要求を持ち出して一度も拒まれた事がない。其中には随分難問題たるべき性質のものもあつたけれど、それを情に訴へて頼めば何時も難問題たらしめずに圓滿な結果を告ぐる。私も初から理窟は言はぬ。理窟は大抵の場合五分五分で相方に立つものだから兎角面倒に成り易い。それを知つて居るから常に感情に訴ふるやうにし、幾分無理かも知れぬけれども日墨兩國の地位からすれば多少讓歩しても宜からうではないかという風に持ち込むのだが、それで必ず豫期通の解決が得らるる會て青筋を立つるとか口角沫をとばして争ふといふ如き事なく、所謂樽俎玉帛(そんしやうぎよくはく)談笑の間に埒が明く。是は私自身が獨り言ふのみでなく皆が認めて語り、且つ喜ぶ所だ。併しそれをつまり私の幹旋の功に歸するけれども、其實幹旋の功なるものは幾千もなく、本く所墨國の官民の日本の官民に對する同情の厚きに止まる。

又幾千もない私の幹旋の功なるものが、他國に於ける他人の大に盡力したと全く同一の結果を見たので、是が私の平生甚だ多幸として深く自ら喜ぶ所以である。

墨西哥に於ける親日感情の如何を見るべく、茲に一二の例話を試みやう。第一は革命戦争の勃發當時に首相マデローの家族が期せずして皆私の處に落ちつた事だ。憶ひ起すが二月九日の朝であつた。騒動はその七時に初まり、七時半に知人から電話で知らせて来たが、只騒動が起つたと聞いたのみで何の原因やら如何いふ状勢やら分らぬ。近く銃丸の聲がポンポンとするばかりだ。丁度其日は日曜とて落ちて居たが、是は堪らぬとて直に馬車を飛ばし、一度は町の方へと志したが、思へば大政廳の在る所、様子を知らずに無暗に飛出しては危険だ。先ず大統領の官邸を訪はう、すれば委細が分らうと氣を變へて駈け着くると、早官邸には夫人ばかりで、大統領は電話で急報に接し、唯今兵學校から五十名の士官候

補生を連れて征討の為に町の方へ出掛けたとの話、大層様子を氣遣つて胸を痛めて居らるるから、私は御氣の毒に思つて色々慰めをいつて居る中、私の妻も亦騒動と聞いて非常に心配し出し、大統領夫人とは單に官吏の妻としての公の交際のみでなく別に私の關係で深い交を結んで居たのだから氣が氣でない、が別當は私が連れて出て居る。已むなく是非自分も行きたい電話で言つて寄越す、そこで別當を迎へにやるといふ様な騒ぎ、間もなく私の妻も来る、此私等夫妻の外大統領官邸にはまだ誰も見舞に來て居らぬ。銃砲聲は手に取る様に聞こゆる。益々激しくなつて來。私は實は様子を聞く為に一寸來たので今少し居りたいけれども居留民の上も案ぜらるるから、一先づ馬車を驅り倉皇引返した。妻のみは夫人の御淋しからうと思つて残して來たのであつた。

(三)

公使館へ着くと六人乗りの自働車が二臺居る、不思議に思つて内に入ると意外にも大統領の両親が秘書官二人を率い、それに娘さん達が三人、其叉子供達が四人來て居られ其人達は座敷に居る、他の下女、下男、保姆等が多數跟いて來て居て此人達は玉突室に控へて居る。私は思ひ掛けなく顔見合せていや是はどうもといった様な挨拶、實は西洋の風習として家族別々に住むのだから、無論御両親夫婦は大統領とは別居して居らるる、嫁いだ娘は夫の家に居る。といふ様な次第で斯かる咄嗟の場合に互に相約するなどいふ隙は無い。全く期せずして日本公使館に落ちつたのだ。私は内家内も大分大勢なのだが、更に二十二人の俄か客を迎へた事故如何する事もならぬ、そろそろ晝飯の支度もせなければならぬ、然るに一方戦争は段々猛烈になり居留民も遁げて來るから其世話もせなければならぬ、到底客の待遇をして居られぬから、急いで妻の處へ電話を掛けて呼び戻す。

妻は心ならずも大統領官邸を辭し歸つたので家へ着いたのは十一時頃であつた、それから大騒ぎをして漸く一時頃に晝飯を済ませたが、忽ち又オートモビルの聲がするから、ハテなと思つて門に出迎へると、それは大統領夫人であつて侍女一人を伴れて日本公使館に避難されたのだ。私は此事が最も能く墨西哥人に對する感情如何を證すると思ふ。大統領官邸に最も近きものを言へば獨逸若くは奧太利の公使館がある。然るに何を苦んで最も遠距離にある日本公使館に斯くも期せずして皆が非難するのであらうか。それは日頃日本人は墨西哥人の同情を得て居るから、いざ騒亂となつても叛軍からも官軍からも何れからも敢て日本公使館に銃口を向くことない上に、又日頃交誼の親密に、敬愛の念が互に旺盛な所から、他とは違つて駆け駆けに頼み込んで素氣なく拒まるる憂はない、先づ一番安全の場所と信ぜられたからであらう。

次にはマデロー政府を覆へしたものは現ウエルタ政府だが、感心な事には此政府から初中終日日本公使館へ慰問使を遣はし、且つ特にマデローの家族の庇護に

就いて禮を述べて居る。此度の事は政治上の争いであつて私怨に本くものでない、それ故マデロー夫人や其老父母の庇護に就ては深大の感謝の念を抱く。幸に皆さんに御怪我は無いか、御不自由はないかといふ。此方からも偶ま危険な事があれば毎度注意してやる。婦人や老人子供居る所へ流丸が入つて来るが萬一の事があつたら御互に名譽でない、何卒氣を着けて貰ひたい。我々のマデロー氏の家族を庇護するには何等黨派的感情の其間に存するものでない。即ち大統領の家族としてでは無く、單に我親愛なる墨西哥人としてこれに同情を寄する迄だといふてやる。

(四)

更に今日の地を變へて言はば、貴下の明日の運命も如何様なことか豫めトすべきでない、若し不幸にして貴下が今日のマデロー氏たる事があるならば、我々は進んで貴下の家族を庇護する事、亦今日のマデロー氏の家族に於けると異なる事は無い考だといつてやつたするとウエルタ氏も、能く貴意を了解しました。可成危険の無い様に注意すると言ひ、非常な喜の意を表して禮を言つて來た。ウエルタ氏己に然り、更に新舊兩政府黨の人々から毎日引も切らず禮を言つて來る。

實に斯ういふ際に人を救ふといふ事は容易なものでない、何しろ兵火の間だから肝腎の食料を得る事が難い。マアケットが無い。然るに客は廿三人もある。日本人の地位あるものも六七人は遁げて來て居る。只さへ公使館員は家族が多いのに此多勢の俄客で内は大混雜毎日階上の食卓に二十三人、階下の卓にも三十幾人が居廻る、珈琲、麵包(ばん)、卵ばかりでも其要する食料は大したものだが、更に牛乳やら牛肉やら羊肉やら野菜やらを要する。僅ばかり求めた分では直ぐに無くなる。が近くは得られぬ。臨時の自動車を雇ふて二三里の遠方、而かも弾丸中を潜つて買ひに出る。其又價が三倍四倍である、それでも猶且つ賣る所がないといふ始末。その世話を妻が一切遣る庖厨の苦心といったら言はん方ない。更にマデローの家族、何といつても身分高き大統領の家族だから唯の友人とは違つて自ら待遇に差別を設けざるを得ない。即ち二の膳付きで餐應するといふ譯だから其材料の拾集に人一倍骨が折れる。が幸にもマデロー氏の家族の日本公使館滞在中は充分の満足を與へ、そして遂に外国に落ち延ぶるに至るや、瀛車に乗せ、瀛船で出掛くる迄も世話をし、斯くて廿二日に愈よ彼等家族の故國を後に立ち去る姿を見届けて歸て來た。

戦いが終り舊政府の亡びて、新政府の確實に樹立するや、新舊の外務大臣が先づ一番に禮に來て、廿三人の墨西哥人が命を全うしたのは全く日本人の義侠心の致す所、それに對して厚く感謝の意を表するといふて去る、續いて新舊の各大臣が揃つて來た。是が廿一日の話で、更に舊マデロー黨も新内閣黨も、新教徒もカトリック教徒も、貴衆兩院議員も來るといふ始末。その應接ばかりも仲々大抵で

ない花束の如きは山の如くに積む。更に電報を以つて感謝の意を表するものは引も切らぬ、中には是れ日本人に固有なる義侠的道德の發揚なりなどといふ文言もある。大した騒ぎであつた。私のみに宛てでなく私の妻に宛つるものも亦少くない、更に又列國の外交團からも、盛に讃辭を與へ、實に日本公使夫妻程勇敢に慈善の為に働く者はない。慈善は人道上よりも義侠上よりも稱揚すべく、在墨外國使臣は其外交團の名譽として祝意を表するといつて來る。婦人の側は米國大使の夫人が代表で大きな花束を多々氏の妻に贈つて來た。

(五)

更に此時の働きに對して多大の名譽の表彰を感じたのは二十日に於ける新大統領ウエルタ氏の就任の挨拶の時であつた。此日氏は大禮服を嚴めしく着けて各國公使に握手をしたが、他の公使には只それだけで済んだものを特に私のみに對しては「予の大統領の職に就くと同時に、予及び墨西哥人全體の名譽に於て、墨西哥人の日本人に對して有する格別なる同情を表明し戦中閣下が我等墨西哥人に對して表せられし多大の交誼を深謝す」といふ挨拶があつた。私の側には澳太利公使が居つて最も能くそれを聞き、それより少し離れて居た英國公使も亦之を聞き得た。それ故式了つて一同外交官控席に就くや、早速澳國公使が私の側へ來て、今日一番名譽を荷ふたのは日本公使であつたとて祝意を述る。次に英國公使が來て祝意を述る。すると各國公使が盡く聞き知つて、ドヤドヤと私の身邊に集つて祝意を述ぶる。私は身に餘る光榮を覺えた。それから帰らうとすると、書記官を左右に附けて見送らす、官前に出ると此處には又意外にも雲霞の如き群集が堵列をなして出迎へ、一聲に日本萬歳と高く叫ぶ、此の如きは從來殆んど例の無い事だ、此等を以ても如何に墨西哥人の對日感情が温かきかを知るに足らうと信ずる。

(六)

そして其中から十人の代表者が何れも帽子に喪章を着けて現れ、我公使館に入つて來て鄭重に哀悼の辭を述べた。他の帝王若くは大統領の死も是迄幾回かあつたけれども、我明治大帝に對し奉る如き斯様なマニフェステーションをやつた事は未だ曾て聞いた例がない。此の如きは、決して外交的虚禮と見るべきでなく、何等求むる所なき赤誠の表示である。

墨西哥人にアンチアメリカンの感情ある事は、是掩として掩ひ難き處で、それが一朝一夕の故でなく、長い政治的歴史的感情から胚胎して居る。即ち今より六十年前に豊かなる金鑛のあるカリフォルニア、テキサス、ニューメキシコ等を格別の理由無く取上げて自國に合體せひめて居る。今日盛に日本人排斥を叫んで居る加州は墨西哥人の呼んで上加州と名づくるもの。上加州の排日感情の高きに正比して、下加州には反對に親日感情の高いのも一奇であるが、兎に角僅か六

十三年前迄自國領であつたものが、今日米國に併されて居る事は墨西哥人に取つて甚だ善い追憶の材料でない。それに如何に考へて見ても、只墨西哥の國勢弱きに乗じて、此土地は好い土地だから取るぜといふ以外に何等の理由の見るべきものが米國側に無かつたと一般に信じて居る、否彼等の信ずるのみならず、取つた側の米國の歴史家すら明かに左様認めて十九世紀においても亂暴なる領土の掠奪をやつたものだとしてそれを評して居る者があるでないか。此怨恨は實に墨西哥全國を擧つてのアンチアメリカンの感情の基である、單に知識のある上中流の階級に止まらず、山に木を伐る樵夫でも、海の魚を撈漁翁でも、苟も墨西哥の領内に生れて人たる形體を備へて居る限りは、實に米國人を以て不倶戴天の敵と心得、其復讐の實力の有無に拘らず、何時かは一矢相酬ひん事を欲して居る。其由來する所單に眼前の政治的關係に止まらず、歴史的に深く且つ遠き根底を持つて居る。此に於てか北方にある毎に亜米利加人が北方の叛賊を助けた。叛賊を助けた。叛賊に鐵砲を供給した、彈藥を與へたとて騒ぐ。實際は如何か知らぬが兎に角噂が立つ。墨人の對米感情からは此噂が立ち易い。噂が少し立つとソラと直ぐに反アメリカンの感情が起こる。遂此間も反アメリカのムーヴメントが起こつたが、是は珍しくない、昨年にも一昨年にもあつたのだ。つまり墨西哥人の排米感情は常に大海の水の如く汪洋として漲つて居り、微風僅に至れば直に洪波を捲起さんとして居るのだ。況んや米國とは陸續きである所から一層事が生じ易い。即ち是も亦墨人が強き親日感情を有するに對し米人が日人を排斥するからそれで米國人が憎い憎いといふ如き譯でない、それと是とは全く相關せぬ。

(七)

墨西哥人が日本人を以て自分等と同人種だと考ふるに就ては、只眼に見る日本人の風采容貌が相似るといふのみでなく、それには更に傳説の此感情を助くべきものや、古器物の發見等の之を證すべきもの等が多くあるにも因る。彼國の開國神話によれば、太古の世には米大陸と亞細亞大陸とは相連接して居り。彼民族の始祖はアラスカより南下したものだ。其途中に神人に逢つたが、神人は告げし汝等より次第に南を指して下るならば二三日の後必ず大池の中央に小島あり。それにサボテンの大樹があり、其頂に巨鷲の蛇を喰はへたものを發見せん。其處が汝等にとつて發祥の地だから其廻りに國を營めといふ、不思議な神宣を信じて南下する事更に幾日に亘つたが豫期の日限内には發見出来なかつたけれど、二三年の後遂に所謂巨鷲の蛇を喰はへた姿を一大池心の小島なるサボテンの大樹の梢に認むるを得た。そこでこれを中心として都市を開いたのが、即ち今日の墨西哥府だといはるる。今尚ほ其神宣の靈地と呼ぶるものが存在する。墨西哥の國旗の紋章にサボテンの梢に宿る蛇を喰へた巨鷲を現はすのも此神話に由來するものだ。墨西哥ではサボテンは二丈三丈の高さに發育し、大きな實が生る。味は水

瓜の様で遙かに旨い。

墨西哥では近來地下から古代の家屋が發掘されて色々考古學上人類學上の補となるべき材料が發見さるる。曲玉、埴輪の類も澤山出るが、それには我が國の物と酷似するものが澤山ある。何れも年代は今より二三千年前と稱する稱せられて居るから墨西哥の建国は餘程古いに相違あるまい。其他の土器にも酷似するものが少くない。更に建築若しくは風俗などに徴すべく足を田舎に向くるなら、日本人の田舎とソックリの物を少からず發見する。家屋の構造といひ、洗濯類の仕事といひ、是が偶然の暗合とは思はれぬものが澤山ある。此方面に是より忠實なる學者の研究をを向くるなら、屹度幾多の価値ある發見があらうと思はるるが、如何せん墨西哥の發見は僅々四百年前の事に過ぎず。其中三百年を西班牙の統監政治の下に過ぎしたので、實際獨立し得てからは年所甚だ淺く、僅に百年位のものに過ぎぬ、従つて百事皆新しく、考古學の如きも研究は甚だ少いが、近時次第に恰もポンペー市の如く地下の都市を發見し、發掘しつつあるが、若し日本あたりから特志の研究者が往つて十分日本との比較研究でもやつたら面白からうと思ふ。ポンペーの都市から少く離れた所にポポカトペテルと稱する巨嶽があつて、其形恰も我富士山に似、峰頂に四時白雪を戴いて居るが、是は火山である。即ちポポカトペテルといふは墨西哥の土語で噴火山を意味する。地下の大都市の此山裔に横はる所から想ふと、昔し猛烈なる噴火の為に埋没された事と思ふ。メキシコの土語其ものが又東洋系に属する。言語學上から研究の歩武を進むる事も自ら此墨西哥の古史の暗黒面に一道の光明を投ずるものと思ふ。即ち墨西哥人が我々日本人と共に一種の東洋人種なりと信ずる事は荒唐無稽の説たるべき物でないのである(完)